

アルバ・ミルダール、ビオラ・クライン『婦人の二つの役割』

Alva Myrdal and Viola Klein, *Women's Two Roles*, Routledge & Kegan Paul LTD. 1956 (2nd Impression 1962), 208 pp.

最近わが国でも労働力不足がしだいに深刻化するにつれて、女子労働力の活用が真剣に考えられており、事実、女子の労働力率は上昇する傾向をみせている。労働力が不足になるにつれて、いまのところ労働力率の低い女子とくに有配偶女子に期待がかけられるのは当然だといえる。しかし、男子の場合とちがって女子の労働力化については特別に複雑な問題が伴うことに注意しなければならない。それは、女子労働力には、本来、ふたつの役割—家庭と仕事—が負わせられるという事実にもとづく問題である。単純な労働力政策の波にのって家庭に在った女子がむぞうさに労働にかり出され、家庭責任がおろそかにされるようなことがあれば、『犯罪白書』（昭和42年版）が警告しているように、子女の非行化のごとき事例の増加をまねき、社会的に大きな対価を支払われねばならないはめに陥るであろう。

ここに取り上げたA. ミルダールとV. クラインの著書は、女子に課せられる前述のふたつの役割の調和の問題を取り扱っており、今後わが国の女子労働力問題を考えるについて重要な示唆を与える書物である。著者は女子が社会的労働に参加することに積極的な意味をみとめている。産業革命前の社会においては女子は農業または家内工業において社会的労働に参加していたが、産業革命後は家庭と職場の分難がすみ女子の労働参加は困難になると同時に、既婚女子が家庭外で働くことは社会的に好ましくないという考え方が支配的となった。しかし、技術の進歩による生産の機械化は労働を女子にも適したものとし、交通の発達に家庭と職場の連結を容易にし、また各種の研究や経験は女子が男子に劣らぬ能力を持っていることを証明したので、しだいに女子の社会的労働に対する期待が大きくなってきた。

このような経済的変化とともに、女子労働力の活用に決定的に重要な役割を果たしたのは家族規模の縮小である。著者の計算によると、女子の結婚年齢を25歳とし子供数を3人として、結婚から第1子、第1子から第2子、第2子から第3子の出生間隔を2年とすると、最後の子供が9歳になるまで家庭に止まるとしても、40歳で養育の責任から解放され、平均余命の長くなっている現在、相当な年月を家庭外の仕事につくことができるであろう。

これらの条件のもとで女子労働の活用は大いに進められなければならないが、著者は同時に、家庭責任の重要性とくに子供に対する影響の大きさにも注意を払う。本書の第7章“子供への影響”は主としてこの問題を扱っているが、女子労働力問題の最も大きな問題点はここにあると考えられる。

わが国では、女子労働力の本格的な活用は将来のことに属すると言うべきであるが、イギリス、スウェーデンなどでも、女子労働をめぐる問題はまだ十分に解決済みであるとはいえない。著者は第9章“次の段階”で、必要な調整としてつぎのような提案をおこなっている。

1. 男女両性の個人的態度の改善。まず女性は人生のはじめにあたって、教育期、家族形成期、活動期の3つの局面をあらかじめ予定し、この期間をどのように過すかを計画すべきである。男性の側では、女性が社会的にふたつの役割を果たすべき事実を理解し、これに協力すべきである。

2. 労働市場における調整・女性の特殊な役割を考慮に入れ、矛盾が生じないような受け入れ体制がたてられるべきである。産前・産後休暇の拡充や40歳以降の再雇用を円滑にするための訓練が必要である。

3. 社会的調整。ショッピング・センターの配置、給食制度の充実、託児所の増設、家庭補助員の整備などの社会的設備の充実がすすめられなければならない。

具体的な方策は国によって差異はあるが、これらの提案はわが国においても十分参考にされなければならない。(岡崎陽一)